

特集ワイド

「特集ワイド」へご意見、ご感想を tyukan@mainichi.co.jp ファクス 03-3212-0279

この国はどくろ 行こうとしているのか

巨大与党の下で

「心拍数が40程度で、成人男性の正常値の半分程度しかない。主治医からは『いつ倒れてもおかしくない』と言われているのです」

87歳の経済学者はこう語りながら、ゆっくりと肘掛け椅子に腰を下ろした。自宅2階の書斎。窓から冬の陽光が差し込んでいる。2012年2月、心筋梗塞で倒れて約1カ月、東京医科歯科大病院に入院。長時間の手術に耐えて生還した。今は体調を気遣いながら「人生最後の論文を執筆している」という。

「安倍首相は強い経済を取り戻すというが、まだほとんど何もやっていませんよ」。A4のメモを左手に持ちながら話を続ける。論点をまとめてくれたようだ。「経済学者は現実を弱く、エコノミストは経済理論に弱い。だから誤った政策を批判することができない」。そして一段と語気を強めた。「日本経済は二つの大きな病にかかっている」

二つの病とは何か。

一つは国民が税負担を重いと感じていることだ。という。租税の負担感の国際比較を示した表をテーブルに置いた。日本の国民所得に対する税の割合は、先進国では低い。だが「高所得者は軽いと思う人が多いが、中所得者、低所得者は税負担が『重い』と感じている」。つまり国民は税を負担してもそれなりの報いがないと受け止めているのです。

この意識が影響して、減税を訴える政治家は当選し、税

経済学者 伊東 光晴さん(87)

負担を主張する政治家は落選する。安倍首相も消費増税の延期を訴え、昨年の衆院選で勝利した。「日本は財政再建が必要なのにもかかわらず、安倍政権は人気取りのために法人税減税を実行しようとしている。財政が好転しなければ、アベノミクスの『第二の矢』である公共投資は続けられるわけがない」

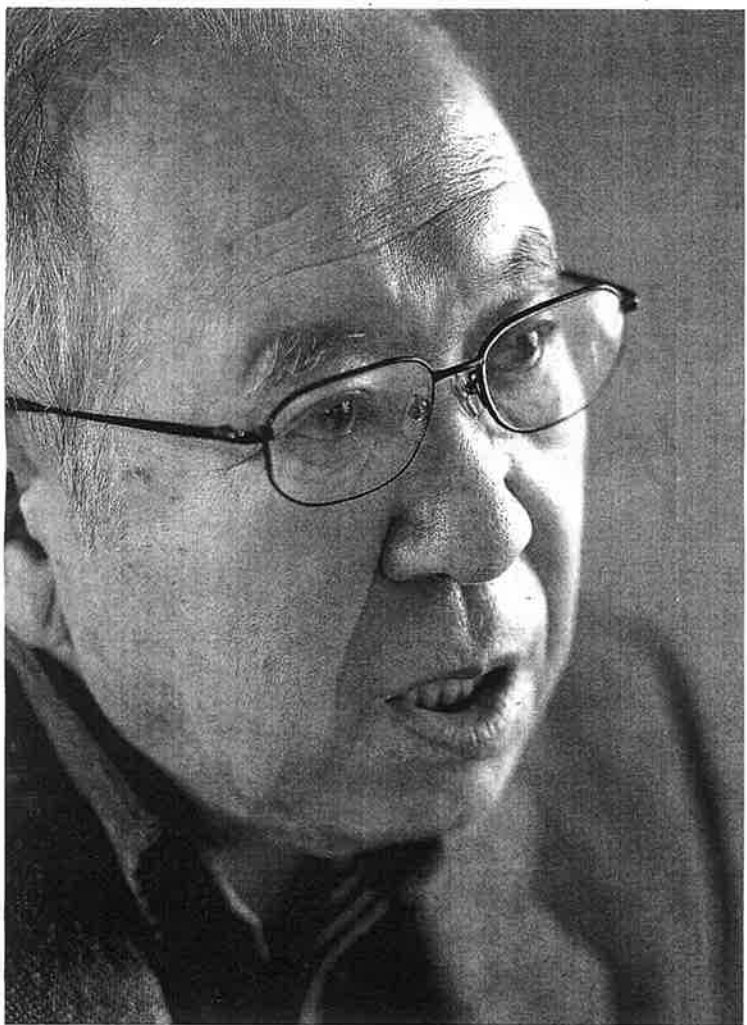
第二の病は、非正規社員が増加し続けている点だと指摘する。「高度成長期に問題になったのは二重構造、つまり近代的な大企業と古いタイプの中小企業との賃金格差などでした。現在は非正規社員が増え、大企業内部にも格差が生じている。これでは生活が改善するはずがない。安倍政権は雇用が増えたとはいいますが、非正規が増え、正規が減っているのに格差を埋める政策を考えていません」

さらに「一定給与以上の正規社員については労働時間が長くなっても残業手当を支払わなくてはならない労働市場を目指している」と批判する。「これほど働く者のことを考えない政策を推進する内閣は戦後にありましたか?」。目を覚ませ、と言わんばかりの強い口調で語り続ける。

二つの病への処方箋も考えず、アベノミクスが成功しているかのよう振る舞う政治

安倍政権は盛んに株高を強調する。確かに日本株は民主党政権下よりも上昇。日経平均株価は12年11月中旬(8600円台)から上昇に転じ、昨年12月30日は1万7450円と2倍になった。

「戦後の自由」を諦めない



—藤井達也撮影

「株高は外国人投資家が、分散投資の観点から買い越しているのが理由。自民への政権交代やアベノミクスとは関係がない。安倍首相は『成功している』と繰り返すが、それは繰り返されると、みんな本当だと信じてしまう。もうそろそろ安倍政権が直伝する幻想から私たちは解放されなければならぬ」。昨年7月に出版した「アベノミクス批判 四本の矢を折る」(岩波書店)は、現在は第7刷とまった。国民もおかしと思いついてはいる証左なのか。

最も懸念するのは三本の矢ではない。「戦後の政治体制を改変することが安倍首相の真の目的。これが隠された『第四の矢』です。私は戦前の社会を見ているからこそ危険性が分かるのです」

安倍内閣は特定秘密保護法を成立・施行させ、閣議決定で

いとう・みつはる 東京都生まれ。東京商科大(現一橋大)卒。京大名誉教授。理論経済学、経済政策専攻。著書に「現代に生きるケインズ」「日本の伏流」など多数。

集団的自衛権の行使を容認した。今年安全保障関連の法整備を進める。一連の政策には戦争ができる国への転換」との批判が根強い。13年12月には首相自らA級戦犯が合祀された靖国神社を参拝した。

「安倍首相は祖父の岸信介元首相は正しかったと信じ切っている。そして岸氏の盟友、東条英機元首相ら戦前の指導者の名譽を回復させたいと願っている。戦後レシームからの脱却」を唱え、憲法を改正し、国家間の紛争解決のため武力を使う戦前のような日本を再び築きたいと考えている。なぜか? 要は歴史を学んでいないからです」

自身は17歳で終戦を迎えた。「国民は家の中で『はかな戦争』と批判しても、表立って戦争反対と訴えた人は少なかった。今の自民党内の現状と似ています」

電気事業審議会委員や国民生活審議会委員を長く務め、東日本大震災前に福島第一原発も歩いた。研究室からは見えない「現場」で、現実と切り結んできた自負がある。

「安倍首相の誤った政策に対して誰も何も言わない、怒らない。私のような批判的な意見を掲載する新聞社も減った。この国は行き着くところまで行かないと正常に戻らない。愚かな戦争も表向きは国民が賛成し、協力した。国にブレーキを掛けるのはとても難しく難しい」。ブレーキが掛からない様は原発再稼働問題にも見える。「再稼働させれば放射性廃棄物がたまり過ぎて必ず対応できなくなる。その時、初めて原発の愚かさ目覚める」

日差しが傾き始めた。「ではこの先は戦前のような暗い社会になる、と」と尋ねると意外な答えが返ってきた。「実は好機でもあるのです」

「政権が明確に右傾化を進めようとするれば、引き戻せるギリギリのところで抵抗する人々がきつと立ち上がる。例えば谷垣禎一幹事長は心の底から本当に安倍首相に賛成しているのだろうか。国民全員が戦前の社会を望んでいるわけではない。戦前回帰の動きと戦後の自由な社会を守る動きが対立し、はじめて社会は正常に戻る。私は諦めていません」。真っすぐこちらを向いた丸顔は赤みを帯びていた。

暮れ始めた冬空は曇が一つもない快晴。「諦めない」と言い切った老学者の生き方のように。

【瀬尾忠義】